

河口湖（伊藤左千夫）

段ばしごがギチギチ音がする。まもなくふすまがあく。茶盆をふすまの片辺へおいて、すこぶるていねいにおじぎをした女は宿の娘らしい。霜枯れのしずかなこのごろ、空もしぐれもようで湖水の水はいよいよおちついて見える。しばらく客というもののなかったような宿のさびしさ。

娘は茶をついで予にすすめる。年は二十ばかりと見えた。紅蓮の花びらをとかして彩色したように顔が美しい。わりあいに顔のはば広く、目の細いところ、土佐絵などによく見る古代女房の顔をほんものに見る心持ちがした。富士のふもと野の霜枯れをたずねてきて、さびしい宿屋に天平式美人を見る、おおいにゆかいであった。

娘は、お中食のしたくいたしましうかといったきり、あまり口数をきかない、予は食事してからちよつと鵜島へゆくから、舟をたのんでくれと命じた。

富士のすそ野を見るものはだれもおなじであろう、かならずみように隔世的夢幻の感にうたれる。この朝予は吉田の駅をでて、とちゅう畑のあいだ森のかげに絹織の梭の音を聞きつつ、やがて大噴火当時そのままの石の原にかかった。千年の風雨も化力をくわうることができず、むろん人間の手もいらず、一木一草もおいたため、ゴツゴツたる石の原を半里あまりあるいた。富士はほとんど雲におおわれて傾斜遠長きすそばかり見たされる。目のさきからじきに山すそに連続した、三、四里もある草木あるいは石の原などをひと目に見わ

たと、すべての光景がどうしてもまぼろしのごとく感ずる。予はふかくこの夢幻の感じに酔うて、河口湖畔の舟津へいでた。舟津の家なみや人のゆききや、馬のゆくのも子どもの遊ぶのも、また湖水の深沈としずかなありさまやが、ことごとく夢中の光景としか思えない。

家なみから北のすみがすこしく湖水へはりだした木立のなかに、古い寺と古い神社とが地つづきに立っている。木立ちはいまさかに黄葉しているが、落ち葉も庭をうずめている。右手な神社のまた右手の一角にまつ黒い大石が乱立して湖水へつきいで、そのうえにちよつとした宿屋がある。まえはわずかに人の通うばかりにせまい。そこに着物などほしかけて女がひとり洗濯をやっていた。これが予のいまおる宿である。そして予はいま上代的紅顔の美女に中食をすすめられつついる。予はさきに宿の娘といったが、このことばをふつうにいう宿屋の娘の軽薄な意味にとられてはこまる。

予の口がおもいせいか、娘はますますかたい。予はことばをおしだすようにして、夏になればずいぶん東京あたりから人がぎますか、夏は涼しいでしょう。鵜島には紅葉がありますか。鵜島まではなん里くらいありますなど話しかけてみたが、娘はただ、ハイハイというばかり、声を聞きながら形は見えないような心持ちだ。段ばしごの下から、

「舟がきてるからお客さまに申しあげておくれ」というのは、主人らしい人の声である。飯がすむ。娘はさが

鵜島は、湖水の沖のちようどまんなかごろにある離れ小島との話で、なんだかひじょうに遠いところでもあるように

思われる。いまからでかけてきょうじゅうに帰ってこられるかしらなどと考える。外のようなすは霧がおりてぼんやりとしてきた。娘はふたたびあがってきて、舟子^{かこ}が待つておりますでございませと例のとおりていねいに両手をついていう。

「どうでしょう、雨になりはしますまいか、遠くへのりだしてから降られちゃ、たいへんですからな」

といえは、

「ハイ……雨になるようなことはなかうと申しておりますが」

という。予は一種の力に引きおこされるような思いに二階をおりる。

宿をでる。五、六歩で左へおりる。でこぼこした石をつたつて二丈^{じよう}ばかりつき立っている、暗黒な大石の下をくぐるとすぐ舟があつた。舟子は、縞^{しま}もめんのカルサンをはいて、大黒^{だいこく}ずきんをかぶつたかわいい老爺^{ろうや}である。

ちよつとずきんをはずし、にこにこ笑つて予におじぎをした。四方の山々にとつぷりと霧がかかつて、うさぎの毛のさきを動かすほどな風もない。重みのあるような、ねばりのあるような黒ずんだ水面に舟足^{ふなあし}をえがいて、舟は広みへでた。

キィーキィーと櫓^ろの音がする。

ふりかえつてみると、いまだた予の宿の周囲がじつにおもしろい。黒石でつまれた高みの上に、りっぱな赤松^{あかまつ}が四、五本森をなして、黄葉^{くもぎ}した櫓^ろがほどよくそれにまじわっている。東側は神社と寺との木立ちにつづいて冬のはじめとはいえ、色づいた木の葉が散らずにあるので、いっそう景色がひきたつて見える。

「じいさん、ここから見ると舟津はじつにえい景色だね！」

「へい、お富士山はあれ、あつこに秦皮^{とねり}の森があります。ちようどあつこらにめいます。へい。こつから東の方角でございます。へい。あの村木^{むらこだ}立ちでございます。へい、そのさきに寺がめいます、森の上からお堂の屋根がめいましょう。法華^{ほっけ}のお寺でございます。あつこはもう勝山^{かつやま}でござります、へい」

「じいさん、どうだろう雨にはなるまいか」

「へい晴れるとえいけしきでござります、残念じゃなあ、お富士山がちよつとでもめいるとえいが」

「じいさん、雨はだいじよぶだろうか」

「へいへい、耳がすこし遠いのでござります。へいあの西山の上がすこし明るうござりますで、たいていだいじようぶでござりましょう。へい、わしこの辺^{へん}のことよう心得てますが、耳が遠うござりますので、じゅうぶんご案内ができませんが残念でござります、へい」

「鵜島へは何里あるかい」

「へい、この海がはば一里、長さ三里でござります。そのちようどまんなかに島があります。舟津から一里あまりでござります」

人里を離れてキィーキィーの櫓^ろ声^{こゑ}がひときわ耳にたつ。舟津の森もぼうつと霧につつまれてしまった。忠実な老爺は予の身ぶりに注意しているとみえ、予が口を動かすと、すぐに推測をたくましくして案内をいうのである。おかしくもあるがすこぶる可憐に思われた。予がうしろをさすと、

「へいあの奥が河口でございます。つまらないところで、へい。晴れてればよう見えますがへい」

舟のゆくはるかさき湖水の北側に二、三軒の家が見えてきた。霧がほとんど山のすそまでおりてきて、わずかにつづみのこした渚^{なみさき}に、ほのかに人里があるのである。やがて霧がおおいかくしそうなようです。予は高い声で、

「あそこはなんという所かい」

「へい、あそこはお石^{いし}でござります。あれでもよつぽどな一村でござります。鵜島はあのまえになります、へい。あれ、いま鳥がひとつ低う飛んでましよう。そんなきにぼうつとした、あれが鵜でござります。まだ小一里でござりましよう」

いよいよ霧がふかくなってきました。舟津も木立ちも消えそうになってきた。キィキィの櫓声となめらかな水面に尾を引く舟足と、立つてる老爺と座しておる予とが、わずかに消しのこされている。

湖水の水は手にすくってみると玉のごとく透明であるが、打見た色は黒い。浅いか深いかわからぬが深いには相違ない。平生^{へいぜい}見つけた水の色ではない、予はいよいよ現世^{げんせ}を遠ざかりつつゆくような心持ちになった。

「じいさん、この湖水の水は黒いねー、どうもほかの水とちがうじゃないか」

「へい、この海は澄んでも底がめいませんでござります。へい、鯉も鮒もおります」

老爺はこの湖水についての案内がおおかたつきたので、しばらく無言にキィキィをやつとる。予もただ舟足の尾をかえりみ、水の色を注意して、頭を空^{くう}に感興^{かんきよう}にふけている。老爺は突然先生とよんだ。かれはいかに予を観察して先生というのか、予は思わず微笑した。かれは、なおかわいらしき

笑いを顔にたたえて話をはじめたのである。

「先生さまなどにやおかしゅうござりましようが、いま先生が水が黒いとおっしゃりますから、わし子どものときから聞いていることを、お笑いぐさに申しあげます」

かれはなおにこにこ笑つてる。

「そりや聞きたい、早く聞かしてくれ」

「へい、そりや大むかしのことだったそうでござります。なんでもなん千年というむかし、甲斐^{かい}と駿河^{すまが}の境さ、大山荒れがはじまったが、ごんごんごうごう暗^{くら}やみの奥で鳴りだしたそうでござります。そうすると、そこら一面石の嵐でござりまして、大石小石の雨がやめどなく降ったそうでござります。五十日のあいだというもの夜とも昼ともあなたわかんねいくらいで、もうこの世が泥海になるのだつて、みんな死ぬ覚悟でいましたところ、五十日めごろから出鳴^{でな}りがしずかになると、夜のあけたように空が晴れたら、このお富士山ができていたというこつでござります」

爺さんはにこにこ笑いながら、予がなんというかと思つてか、予のほうを見ている。

「おもしろい、おもしろい、もっとさきを話して聞かせろ。

爺さん、ほんとにおもしろいよ」

「それからあなた、十里四方もあつた甲斐の海が原になっていました。それで富士川もできました。それから富士山のまわりとところどころへ湖水がのこりました。お富士さまのあれで出口がふさがったもんだから、むかしの甲斐の海の水がのこつたのでござります。ここの湖水はみんな、はいる水はあつてもでる口はないのでござります。だからこの水は大むか

しからの水で甲斐の海のままに変わらない水でござります。
先生さまにこんなうそつこばなしを申しあげてすみませんが……」

「どうして、ほんとにおもしろかったよ。それがほんとの話だよ」

老爺はまじめにかえって、

「もう鵜島がめえてきました。松が青くめいましょう。ごろうじろ、弁天さまのお屋根がすこしめいます。どうも霧が深うなつてめいりました」

高さ四、五丈も、周囲二町もあらうと見える瓠なりな小島の北岸へ舟をつけた。瓠の頭は東にむいている。そのでっぱなに巨大な松が七、八本、あるいは立ち、あるいは這うている。もちろん千年の色を誇っているのである。ほかはことごとく雑木でいっせいに黄葉しているが、上のほう高いところに楓樹があるらしい。木ずえの部分だけまっかに赤く見える。黄色い雲の一端に紅をそそいだようである。

松はとうていこの世のものではない。万葉集に玉松という形容語があるが、真に玉松である。幹の赤い色は、てらてら光るのである。ひとかかえもある珊瑚を見るようだ。珊瑚の幹をならべ、珊瑚の枝をかわしている上に、緑青をべたべた塗りつけたようにぼってりとした青葉をいただいている。老爺は予のために、楓樹にはいのぼって上端にある色よい枝を折ってくれた。手にとれば手を染めそうな色である。

湖も山もしつとりとしずかに日が暮れて、うす青い夕炊きの煙が横雲のようにただようている。舟津の磯の黒い大石の下へ予の舟は帰りついた。老爺も紅葉の枝を持って予と

もにあがってくる。意中の美人はねんごろに予を戸口にむかえて予の手のものを受けとる。見かけによらず如才ない老爺は紅葉を娘の前へだし、これごろうじろ、この紅葉の美しさ、お客さまがぜひお嬢さんへのおみやげになって、大首おつて折ったのぞなどいう。まだ一度も笑顔を見せなかった美人も、いまは花のごときえみをたたえて紅葉をよろこんだ。晩食には湖水でとれた鯉の洗いを馳走してくれ、美人の唇もむろん昼ほどは固くなく、予は愉快的な夢を見たあのような思いで陶然として寝についた。